

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008～2012

課題番号：20241059

研究課題名（和文） ジェンダーを巡る〈暴力〉の諸相—交差・複合差別における
「家族親密圏」の学際的研究研究課題名（英文） Various Aspects of Gender Violence—Interdisciplinary Studies on
“Sphere of Familial Intimacy” in Crossing/Complex Discrimination

研究代表者

栗屋 利江（AWAYA TOSHIE）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：00201905

研究成果の概要（和文）：

ジェンダーをめぐる支配と差別の構造が「家族親密圏」における暴力を通していかに現れるのかということ、アジアとヨーロッパ・アメリカという地域軸、伝統社会における近代化、植民地支配からポストコロニアル状況へという時間軸にそって分析した。その結果、各地域固有の社会的実践や権力関係に見られる〈暴力〉は、支配・被支配の結果であるばかりではなく、相互干渉、癒着、相乗作用の上に成立するものであることが判明した。

研究成果の概要（英文）：

We analyze, how the structures of gender-related rule and discrimination appears through the violence in “Sphere of Familial Intimacy” along the area axes in Asia and Europe/America and the time axes from modernization in the traditional societies, then from the colonial societal to post-colonial situation. As a result it became clear that the violences in social practices and power relationships were the consequences of rule and ruled, moreover resulted from the mutual interferences, adhesions and synergistic effects.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	8,200,000	2,460,000	10,660,000
2009 年度	7,600,000	2,280,000	9,880,000
2010 年度	7,200,000	2,160,000	9,360,000
2011 年度	6,600,000	1,980,000	8,580,000
2012 年度	8,000,000	2,400,000	10,400,000
総計	37,600,000	11,280,000	48,880,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー／ジェンダー

キーワード：家族・親密圏・ジェンダー・女性・家・移民・移民・暴力

1. 研究開始当初の背景

（1）近年、ジェンダー概念が権力の動態として考察されることで、人種や階級といった他の社会的権力関係との関係を問題化できるようになってきた。本研究はその概念を用いてジェンダー的な支配・被支配関係における被支配者＝女性がそれ以外のパラメータ

一においても被支配者であることを指す「複合差別」、および被支配者が別の支配・被支配関係においては逆の位置を占めることを指す「交差差別」の構造を明らかにすることにした。

（2）第三世界のポストコロニアル状況はグローバル化する世界のなかで、ますます財の

再分配を不均等化しつつある。その中で《家族》は多国籍資本によって支配されるマーケットメカニズムに従属させられ、それを支える重要な領域として浮上している。その問題はアジア地域ばかりではなく、世界各地の移民問題や都市問題においても表出している。そこから「家族親密圏」という近代とは切り離された「私的」な領域を設定した。

(3) 伝統社会における差異の存在や社会通念の解明、近代家族像を対象化し、《家族》内部の性別役割分担に着目した家事労働分析、東アジア世界全体に広がる社会思想についての歴史的研究に基づく問題関心が本研究の背景にあった。

本研究の学際的特徴はこれら三つの関心が合流する点に存するといつてよいだろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、社会的に構築された差異の関係性であるジェンダーをめぐる支配と差別の構造を、容易には解消しがたい「暴力」の諸相としてとらえ、そこから生じる権力関係の複雑で複合的な諸問題を分析し、その分析を可能にする適切な枠組みを理論的に構築することである。その際着目するのは、グローバル化する世界、ポストコロニアルな状況における「家族親密圏」である。ここで「家族親密圏」とは、「社会的生の生産と再生産の現場」を意味しており、それを過去と現在の視点から、歴史学、政治学、社会学、哲学・思想史といった分野を学際的に横断し、解明することを企図している。

具体的にいうと(1)ジェンダーの視点から、とくに「家族親密圏」という分析概念を設定し、これに焦点を当てることを通して、あらたなジェンダー概念を構築すること、

(2)「家族親密圏」の構造とそこにある固有な社会的実践ならびに権力関係の経験的、歴史的、理論的な問題を分析し、解明すること、(3)こうした理論的枠組みに基づき、現実には生起している「暴力」への対峙の仕方や解決策を探る、の三点である。

3. 研究の方法

上記目的を遂行するために、範例的領域を研究対象とするA(ジェンダーをめぐる暴力の範例的な事例を多様な地域に即して調査、分析する地域研究者・歴史研究者を基軸とした研究)班、B(東アジア地域を範例的事例として調査・分析する歴史研究者を基軸とした研究)班、及び理論的枠組みの構築を目指すC(ジェンダー理論の史的展開を整理するとともに、各範例の記述、分析に寄り添いつつ、その理論的な概念装置を精緻化し、またグローバル化・ポストコロニアル状況におけるジェンダー論の課題と意味について解明する研究)班を編成した。そしてA/B班の範例領

域(南アジア、東南アジア/マレー社会、中国華南地域、東アジア—中国、日本、韓国、植民地期朝鮮、台湾、沖縄—、南イタリア、南部アメリカ)における資料調査・収集活動、C班を含めて、それらの史資料の分析、議論、シンポジウム等における報告、国内外の研究者との意見交換ならびに執筆活動を経て、公開し、社会に還元するという方法で本研究を進めることを新たな概念構築の方法とした。

4. 研究成果

5年間にわたって、上記方法を用いることで、各地域固有の社会的実践や権力関係について具体的な分析がなされるとともに、C班による概念構築の作業が行われた。その成果は以下の通りである。

(1) 南アジア：研究協力者上澤伸子をバングラデシュに派遣し、本科研研究会において「バングラデシュにおけるマイノリティ集団ガロとジェンダー」報告を行い、その成果は2013年度刊行予定の論集『親密圏の変容と権力の諸相—交差差別と複合差別』(仮称)において、バングラデシュにおける母系制マイノリティ集団ガロ・ジェンダー・災害についての論文としてまとめられた。研究協力者小林磨理恵をダウリー問題の現地調査、資料調査のためにインドに派遣し、本科研研究会「インドにおける「家族親密圏」」で報告し、東京外国語大学海外事情研究所『Quadrante』No.14「インドにおける「結婚持参金(ダウリー)問題」の諸相」および上記論集に「現代インドにおける「結婚持参金(ダウリー)問題」と親密圏」としてまとめられた。アンジャリー・バティア(インド・デリー大学)を招聘し、「優秀な子どもの育成：現代インドにおける中産階級の母性」と題する講演会並びにアルムガム・ダナラクシュミー(大東文化大学)を招聘し、「女性と子どもに対する暴力—タミル・ナドゥにおける地域の健康と社会教育センターの役割」と題する講演会を開催した。これらによりインド・バングラデシュ各現代社会におけるマイノリティ、婚姻制度、家族、子どもの教育と(暴力)の諸関係における問題性が明らかになった。一方、植民地期インドにおける女性と親密圏の問題については粟屋利江が上記論集において、植民地インドにおける女性と親密圏の関係についてまとめている。

(2) 東南アジア：左右田直規をマレーシア大学に派遣し、現地調査・資料調査を行った。その成果は上記論集で『「家族圏」再考—マレー人ムスリム社会を事例に—』において示された。また、社会活動家であるサラスワティ・ムトゥを招聘し、「マレーシアの女性活動家が語る—40年の軌跡—草の根の民主化をめざして」と題する講演会を開催した。マレーシア社会におけるジェンダー、親密圏の

〈暴力〉の実態が明らかになった。

(3) 中国華南地域：澤田ゆかりが「香港における大陸移民の家族」と題する報告を科学研究会で、華南の移民と家族の変容をめぐるシンポジウム(香港大学)で報告した。その成果は上記論集において、香港の家政婦業にみる「親密圏」を内容とする論文としてまとめられた。ロイ・ライ・チン(香港大学)を招聘し、「香港における親家族政策の発展：三つの国際的体験の教訓から」と題する報告を行った。移民が家政婦となっている香港社会の実態とそこにある問題、香港における家族政策の問題が明らかになった。

(4) 東アジア：日本、韓国、中国に関しては「家」概念研究の蓄積があったため、初年度に国際シンポジウム「問題としての『家』再論—存続装置としての養子システム、比較史的視点から—」を開催し、菊池慶子(聖和学園短大)、鄭肯植(ソウル大)、文叔子(韓国国史編纂委員会)、大森映子(多摩大)を招聘し、分担者からは吉田ゆり子、臼井佐知子、栗屋利江が参加した。アジア圏における「家」の意義、問題性についての議論が深まり、社会構造とジェンダー、システムとしての「家」が孕む暴力性について明らかになった。その成果は『Quadrante』No. 15 (2013) (海外事情研究所)に文叔子「朝鮮前期無子女亡妻財産の相続をめぐる訴訟事例」および鄭肯植「弱き者よ、汝の名は…—女性法制史の一断面—」である。また、アメリカ・イリノイ大のロナルド・トビを招聘し、「読書と性差の近世」と題する研究会を開催し、江戸期における読書をジェンダーの視点から分析した。加えて臼井佐知子が中国における訴訟社会について史資料収集、研究会への参加を通して調査分析し、上記論集において、中国における訴訟と女性の関係について著されている。また、吉田ゆり子は近世日本における都市空間とジェンダーに関する調査、分析を行い、同じく論集において、洋妾について問うている。小田原琳を中心にして、ワークショップ「人としてともに生きる 3.11後の未来像を結ぶために—ドキュメンタリー映画『山川菊栄の思想と活動 姉妹たちよ、かく疑うことを習え』上映会+パネルトーク《震災・原発・ジェンダー》」を開催し、山上千恵子(ドキュメンタリー映像作家)、栗田隆子(女性と貧困ネットワーク呼びかけ人)、野本京子がパネリストとして参加し、3.11以降の社会とジェンダーの関連性から暴力の存在を明らかにした。また、小田原琳、樋口拓朗(京都大)、松本哉(社会活動家)をウォール街占拠とジェンダー・親密圏との関連を調査するためにニューヨークに派遣した。その成果は、レベッカ・ソルニット(アメリカ・ジャーナリスト)を招聘し、「《災害ユートピア》論から検証する 3.11」と題するシ

ンポジウム開催となって示された。そこには渋谷望(日本女子大)、林明仁(東京外大)および岩崎稔が参加し、ジェンダーという観点から3.11を検討し、日本社会における暴力という問題に関する実践的示唆を得た。その成果は、『Quadrante』No. 14 (2012) (海外事情研究所)に企画「世界は変えられるという予感」において「高円寺「素人の乱」とウォール街占拠を結ぶ」および「《災害ユートピア》論から検証する3.11」と題した趣旨報告に掲載された。加えて金富子は災害時のジェンダーと暴力についての関心から、関東大震災時の朝鮮人虐殺と「レイビスト神話」について論文を上記論集に掲載した。さらに韓国において日韓ワークショップ「日韓若手人文学者との対話：デモ、研究者の実存、プレカリアート化」を韓国において開催し、栗屋利江、岩崎稔、金富子、小田原琳、鈴木珠美(研究協力者)、古川高子(研究協力者)が参加し、女性研究者が置かれている現在社会の状況を「暴力」ととらえる視点を探究した。

(5) アメリカ合衆国：佐々木孝弘は、19世紀半ばから20世紀半ばにかけてのアメリカ合衆国における家事労働と暴力の関係について明らかにし、上記論集において、アフリカ系アメリカ人女性と家事労働についての論文を執筆した。また、ヘザー・アンドレア・ウィリアムズ(アメリカ・ノースカロライナ大)を招聘し、「南北戦争期のアフリカ系アメリカ人の家族」と題するワークショップを行い、小田原琳および佐々木孝弘がコメントした。

(6) ヨーロッパ：ドイツ・ケルン大のレギーネ・ロンベルクを招聘し、「ハンナ・アーレントにおける人格と世界」と題するワークショップを行い、痛みと暴力についての議論から「暴力圏」の意味を拡大する試みを行った。また小田原琳は19世紀末イタリアにおける南部問題と女性著述家の関係性を追究し、上記論集にその成果を掲載した。加えて、鈴木珠美に依頼し、マルガレータ・ランツィンガー／ラファエッラ・サルティ著『シュピングスの少女』多くの面を持つ象徴的人物ならびに「有益な」女性英雄を翻訳し、現イタリア領南ティロール社会におけるジェンダー構造を分析した。また、古川高子に依頼し、第二次世界大戦後のヨーロッパ諸国における国民国家化の際に家族が国家的暴力により分断される姿を描いたターラ・ザーラ『行方不明の子供たち 第二次世界大戦後ヨーロッパの家族を再構成する』を翻訳した。これらからヨーロッパ社会構造にはめ込まれた「親密圏」におけるジェンダーと暴力の関係が明らかになった。

(7) 理論：セツ・シゲマツ(アメリカ・カリフォルニア大)、武藤一羊(著述家)、秋山洋子(駿河台大)、千田有紀(武蔵大)

を招聘し、「リブ研究の現在」と題するワークショップを開催し、初期リブの歴史に関する議論を行い、ジェンダーと暴力の関係を歴史的に探究した。さらにパトリシア・セラーズ（イギリス・オックスフォード大）、梁鉉娥（韓国、ソウル大）を招聘し、国際シンポジウム「武力紛争下の性暴力—国際法の視点から—」を開催し、現実が生じている女性に対する「暴力」の存在が明示され、性暴力に対する具体的措置についての理論的構築への足がかりを得た。その成果は、パトリシア・セラーズ「武力紛争下の性暴力—国際法の視点から」『Quadrante』No. 12/13 (2011)（海外事情研究所）として著されている。

以上のような具体的な講演会、ワークショップ、シンポジウム、研究会、ならびに史・資料調査・分析から、上記論集において、千田有紀が近代家族論争史と私的親密圏の再定義を行い、大川正彦が本科研の中心的テーマである「交差・複合差別」概念を、ケアの政治経済学批判の視点で、岩崎稔が「家父長制と資本制論争」の観点から資本主義的社会構造と「親密圏」における暴力、再生産労働と暴力についての理論的構築を行っている。これらの理論は1から6までの実例研究により示された具体的な（暴力）が、支配・被支配の一方的関係を体現しているばかりではなく、被支配側の支配側への同意、相互干渉、「家族親密圏」における暴力ゆえの癒着、あるいは相乗作用の結果であることを普遍化しようとしている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 23 件）

1. 澤田ゆかり「超高齢化社会の「危機」と「機会」」『週刊東亜』、査読無、544号、2012、pp. 18-25.
2. 金富子「国民基金の慰労金で謝罪？～日本、慰安婦被害女性、国家補償誤導…もらった人ももらわなかった人も傷」（原文朝鮮語）『週刊東亜』、査読無、861号、2012、pp. 32-33.
3. 佐々木孝弘「財産管理権をめぐる女性の闘い—1868年ノースカロライナ州憲法の制定とその意義—」『アメリカ史研究』、査読無、34号、2011、pp. 36-52.
4. 澤田ゆかり「香港における高齢者の生活保障：年金への不信と越境できない公的サービス」『アジア研ワールドトレンド』、査読無、188号、2011、pp. 12-15.
5. 澤田ゆかり「拡大する医療格差と医療保険の課題」『日中経協ジャーナル』、査読無、210号、2011、pp. 14-17.
6. 吉田ゆり子「近世野田町の成立と岡部氏」

『野田市史研究』、査読無、22号、2011、pp. 32-62.

7. Yoshida Yuriko, 'Artiste ou marginaux: Les sasara de Shinano' 査読有 *Annales* 66e annee-no 4, 2011, pp. 1029-1052.

8. 粟屋利江「インド近代史研究と「植民地責任」論」『歴史学研究』、査読無、865号、2010、pp. 22-26

9. 澤田ゆかり「定年退職年齢の男女差と年金をめぐる言説」『近きに在りて』、査読無、58号、2010、82-90.

10. 小田原琳「歴史の否認—植民地主義史研究に見るイタリア歴史修正主義の現在」『Quadrante』、査読有、12/13、2010、185-195.

11. 金富子「ジェンダー史・教育史から見た植民地近代性論」『歴史学研究』、査読無、867、2010、pp. 34-45.

12. 金富子「『韓国併合』100年と韓国の女性史・ジェンダー史研究の新潮流」『ジェンダー史学』、査読無、6、2010、pp. 85-91.

13. 吉田ゆり子「幕末維新期における横須賀大瀧遊郭」『年報 都市史研究』、査読無、17、2010、pp. 50-63.

14. 左右田直規「植民地教育と近代歴史学—英領マラヤのマレー語歴史教科書に関する一考察」『歴史学研究』、査読無、863、2010、pp. 32-41、61.

15. 澤田ゆかり「中国社会における安定装置としての労働仲裁と社会保険—NGO 台頭の背景と限界から」『国際問題』、査読無、581、2009、pp. 32-41.

16. 澤田ゆかり「特集 中国社会主义を問い直す—『労働者の視点から』報告へのコメント」『現代中国研究』、査読無、25、2009、pp. 62-68.

17. 金富子「在日朝鮮人女性と日本軍『慰安婦』問題解決運動—1990年代のヨソネットの運動経験から」『戦争と性』、査読無、66、2009、11-23.

18. 金富子「宗主国／植民地における『臣民』とジェンダー—兵役義務・参政権・義務教育制」『季刊 戦争責任研究』、査読無、66、2009、11-23.

19. 澤田ゆかり「香港のDV事情は？梁麗清さん来日」『女たちの21世紀』、査読無、56、2008、56-57.

20. 野本京子「戦前から戦後における『婦人之友』友の会の農村生活改善運動—農村友の会の活動を中心に—」『東京外国語大学論集』、査読無、77、2008、187-207.

〔学会発表〕（計 25 件）

1. Naoki Soda, "The Muslim Community in a New Town: With Special Reference to the Role of Suraus in a Malaysian Suburb" Annual Conference for the Consortium of Asian and African Studies、2013年01月

- 29日、National University of Singapore.
2. 粟屋利江「現代インドにおける格差と社会運動—ダリト・フェミニズムを焦点として」、現代インド拠点プロジェクト全国集会、2012年11月23日、龍谷大学。
 3. 野本京子「日本における「国際日本学」をめぐる動向」、北京日本学研究中心—中華日本学会主催 第3回東アジア日本研究フォーラム、2012年11月04日、中国社会科学院。
 4. 佐々木孝弘「アフリカ系アメリカ人家事労働従事者の生きていた世界—奴隷制度廃止によって何が変わったのか?—」、アメリカ南部史研究会札幌部会、2012年10月27日、北海学園大学。
 5. 金富子「慰安婦」問題にみる脱植民地化／再植民地化」、日仏会館フランス事務所主催「3・11以降のフェミニズムを問う」、2012年10月07日、東京日仏会館。
 6. 金富子「『慰安婦』問題に対する日本の法的責任と脱植民地主義」、ソウル大学校女性研究所主催定例研究会、2012年09月06日、ソウル大学校。
 7. 臼井佐知子「宗族組織拡大の様相」、「千年徽州、人材と経済社会の発展」安徽省社会科学界連合会、黄山市人民政府、安徽省社会科学院、中国明史学会、2012年07月28/29日、安徽省。
 8. 佐々木孝弘「アフリカ系アメリカ人女性家事労働者の世界(1820年—1940年)—オーラル史料から浮かび上がってくる彼女たちの姿—」、アメリカ南部史研究会第9回例会、2012年06月23日、共立女子大学。
 9. 澤田ゆかり「中国における社会保障政策—失業保険の限界と代替手段—」、公益財団法人東京財団、2011年12月21日、東京財団。
 10. 吉田ゆり子「信州下伊那の寺社と芸能者」、史学会大会シンポジウム「身分的周縁と地域社会」2011年11月6日、東京大学。
 11. 粟屋利江「インド社会におけるダリト(不可触民)をめぐる」、第11回日韓歴史家会議、2011年10月28/30日、ソウル、世宗ホテル。
 12. 吉田ゆり子「浦賀の『洗濯屋』と遊所」、浦賀歴史研究所・浦研講座、2011年2月21日、住友重機浦賀工場内ミュージアムパーク推進センター。
 13. 臼井佐知子「明清時代における個人間の契約文書」、「東アジア近世契約文書の諸様相」、2011年1月8日、韓国ソウル・韓国学中央研究院。
 14. 金富子「植民地期朝鮮半島における遊郭」第15回遊廓社会研究会、2010年12月25日、2010年12月25日 東京大学。
 15. 金富子「2000年法廷以後の日本軍「慰安婦」問題解決運動」、韓国挺身隊問題対策協議結成20周年記念・国際学術シンポジウム、

- 2010年11月18日、ソウル。
16. 米谷匡史「日中戦争期の文化抗争—帝国のメディアと文化工作のネットワーク」、シンポジウム「日本近代文学と戦争」、2010年11月14日、愛知県立大学。
 17. 金富子「植民地教育が求めた朝鮮人像とジェンダー—1930年代以降を中心に」、朝鮮史研究会大会、2010年10月17日、明星大学。
 18. 澤田ゆかり「現代中国のジェンダーと社会保障」、日本現代中国学会、2010年10月17日、中央大学多摩キャンパス。
 19. 金富子「韓日過去史の清算と東アジアの平和」『慰安婦』問題の解決をめざして」韓・日強制併合100年国際学術大会、2010年8月27日、ソウル。
 20. 臼井佐知子「中国清代社会における各構成体機能の地域比較—訴訟関係文書を資料として」、東洋史研究会大会、2009年11月3日、京都大学。
 21. 粟屋利江「英領期インドのメディア広告分析—20世紀前半における消費への「誘い」」、日本南アジア学会第22回大会、2009年10月4日、北九州市立大学。
 22. 粟屋利江「「植民地近代性」を考えるととは?」、日本南アジア学会設立20周年記念連続シンポジウム第6回、2008年6月23日、東京大学。

〔図書〕(計40件)

1. 塚田孝他編『身分的周縁と地域社会』、山川出版社、吉田ゆり子「信州下伊那の寺社と芸能者」pp. 149-198、2013、300頁。
2. 岩崎稔、成田龍一、喜安朗『立ちすくむ歴史』、せりか書房、2012、286頁。
3. 床呂郁哉・西井涼子・福島康博(編)『東南アジアのイスラーム』左右田直規「ニュータウンのムスリム・コミュニティ」pp. 259-285、2012、412頁。
4. 北村暁夫、伊藤武『近代イタリアの歴史—16世紀から現代まで—』、ミネルヴァ書房 小田原琳「自由主義の時代」pp. 73-94、2012、280頁。
5. 遠藤公嗣『個人加盟ユニオンと労働 NPO: 排除された労働者の権利擁護』、ミネルヴァ書房、澤田ゆかり「中国における「工会」と草の根労働NGOの変容」pp. 209-242、2012、253頁。
6. 樋口映美編著『流動する〈黒人〉コミュニティ—アメリカ史を問う—』、彩流社、佐々木孝弘「外に向かって開かれた家族とコミュニティ—1900年、ノースキャロライナ州ダーラム市のアフリカ系アメリカ人たち—」pp. 43-70、2012、284頁。
7. 和田春樹他編『岩波講座 東アジア近代通史 第5巻 新秩序の模索 1930年代』岩波書店、粟屋利江「1930年代インドにおける「国民国家」の模索—国民・宗教・女性」

- pp. 310-330、2011、380 頁。
8. 鈴木正宗編『南アジアの文化と社会を読み解く』、慶應義塾大学東アジア研究所、粟屋利江「南インドのカーストとジェンダー—ケーララにおける母系制の変容を中心に」pp. 219-251、2011、476 頁。
9. 別冊都市史研究『伝統都市を比較する』、山川出版社、吉田ゆり子「人形芝居—芸能の担い手と地域社会—」pp. 108-120、2011、299 頁。
10. 粟屋利江・松本悠子編『人の移動と文化の交差』ジェンダー史叢書 7、明石書店、粟屋利江、「女児の命」をめぐる闘争—英領期インドにおける女嬰殺しをめぐる—」pp. 188-190、2010、324 頁。
11. 竹村和子・義江明子編『思想と文化』ジェンダー史叢書 3、明石書店、粟屋利江「わたちのラーマーヤナ」pp. 188-190、2010、292 頁。
12. 宋連玉・金栄編著『軍隊と性暴力』、現代史料出版、金富子「朝鮮南部の植民地都市・群山の性売買—遊廓・アメリカタウン・性売買集結地」pp. 86-124、2010、390 頁。
13. 大越愛子／井桁碧編著『現代フェミニズムのエッセックス』、青弓社、金富子「女性国際戦犯法廷後の韓国女性運動と日本—フェミニズム、ナショナリズム、植民地主義」、pp. 143-170、2010、320 頁。
14. 後藤雅知他編『山里の社会史』、山川出版社、吉田ゆり子「「家」の記録—信濃国『熊谷家伝記』の史料的検討」pp. 105-143、2010、321 頁。
15. 金井光太郎編『アメリカの愛国心とアイデンティティー—自由の国の記憶・ジェンダー・人種』、彩流社、佐々木孝弘「離婚訴訟に見る婚姻の意味とその変化(1814-1933年)—ノースカロライナ州の場合」pp. 87-110、2009、257 頁。
16. 『韓日間歴史懸案の国際法的再照明』、東北亜歴史財団、金富子「朝鮮人「慰安婦」戦時動員—「慰安婦」制度の強制性を再考する」pp. 13-46 頁、2009、666 頁。
17. 吉田ゆり子『兵と農の分離』、山川出版社、2008、102 頁。
18. 武田康裕・丸川知雄・巖善平編『政策：現代アジア研究 3』、慶應義塾大学出版会、澤田ゆかり「第 14 章 グローバル化のもとでの中国の社会保障政策—少子高齢化時代のソーシャル・セーフティネット」、pp. 357-378、2008 年、408 頁。
19. 岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編『戦後日本スタディーズ』、紀伊國屋書店、2008、372 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

粟屋 利江 (AWAYA TOSHIE)

- 東京外国語大学・
大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：00201905
- (2) 研究分担者
- 岩崎 稔 (IWSAKI MINORU)
東京外国語大学・
大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：10201948
- 澤田 ゆかり (SAWADA YUKARI)
東京外国語大学・
大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：50313268
- 佐々木 孝弘 (SASAKI TAKAHIRO)
東京外国語大学・
大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：10225873
- 野本 京子 (NNOMOTO KYOKO)
東京外国語大学・
大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：90208281
- 吉田 ゆり子 (YOSHIDA YURIKO)
東京外国語大学・
大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：50196888
- 大川 正彦 (OKAWA MASAHIKO)
東京外国語大学・
大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：80323731
- 臼井 佐知子 (USUI SACHIKO)
東京外国語大学・
大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：70185007
- 金 富子 (KIM PUJA)
東京外国語大学・
大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：40558102
- 米谷 匡史 (YONETANI MASAFUMI)
東京外国語大学・
大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：80251312
- 左右田 直規 (SOUA NAOKI)
東京外国語大学・
大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：30345318
- 小田原 琳 (ODAWARA RIN)
東京外国語大学・外国語大学・研究員
研究者番号：70466910